それ客をうけんと思はゞ、貴人ならばぢきに參、御茶可指上旨、家老か近習出頭人などを以申上、御出あらむとあらば、御あいては御意次第にする事尤也、扨さきだつて御禮に參、その日にいたりても、御むかひとて參べし、人をつけおき、御出の節道まで出むかひ、御ともして入べし、扨御あいて衆をたのみ、亭主は御茶の湯をかけ仕などとて勝手へ入、少もはやく中くゞりまで出むかひたる事尤也、扨御歸の節御供して行、御禮申上、翌日も御機嫌伺とて參上尤也、御あいて衆へも翌朝禮に行べし、尤小性衆料理人をよびてよし、其外品によるべし、

〔茶之湯六宗匠傳記〕一〕千利休宗易居士自筆

一客貴人高位ならば、御出の時刻に一時成共二時なり共、あるひは半時成共、亭主御迎に出、我宿まで御同道申て我は内へ入べし、

一亭主より客高位ならば、二重路地の外へ出向て禮をなして、後にはくゞりひらひて、御入候得と計言也、高位などへ餘り物を申さぬ物也、同じくは外路地へ出向ひたる時、同じくは直に入る事が本也、

〔茶之湯六宗匠傳記〕三〕古田織部殿自筆の寫

一御成又は貴人高位を申入るは、冬寒氣の時分は片口に湯を入、てい主持出、手水鉢の上に置、又御近習に爲持て出しかけさする事あり、

〔喫茶雜話〕一適の貴客には茶巾茶筅あたらしきをもちゆ、それ程の時は、茶巾のたちめぬはざるものなり、口傳色々あり、かくのごときの尊客の時は、茶碗などに茶筅茶巾等を入、勝手より取出し、賓に御茶進上して後、亭（亭下恐有誤脫）此茶碗にてお茶を服すべし、一には憚、一には御用心の時宜なり、

〔和泉草〕二〕高位高官之御方茶湯